といふ諺がありますが、幼兒にとりては、一の豫防は千萬の治療に優るといふて宜しからうと存じます。

神經の活動と筋肉の運動とは右に申すが如くにて始まりましたが、其の働きは次には幼兒生命の保存の爲めに肺臟と心臟とに起ります、これを呼吸、循環と名づけます。尙ほこゝに幼兒が生れ出づると直に三の大切なる變化が起ると申されます。其の一は神經系の働くこと、二には肺臟廣がり呼吸生ずること、三には血液循環の通路が變はることです。幼兒胎内に在るときは肺臟は用をなしませぬ故、血液は心臟の右側より直に左側に進みましたが、今は肺臟を通過致します。血液循環のことは勿論幼兒身體の組立は、生理學又解剖學によらなければ說きがたき所もありますれば、こゝには略します。

（以下次號）

史傳

吉田松陰の母瀧子

下村三四吉

江戸幕府時代の末つ方、我が國人を二百餘年間鎖國泰平の夢よりさましたる米艦初度の渡來の翌年、即ち安政元年、海外に遊び、世界の形勢を視察せんとて、再來の米艦に便乘を依賴して拒絶せられ、國禁を犯せりとのかどにて罪を得たるは、誰も知る長州の英傑贈正四位吉田松陰その人なり。氏は、その後安政五年時の大老井伊直弼の服心たる間部詮勝を京都に要擊せんことを企てゝ、事成らず、遂にはいはゆる安政大獄の狂瀾にまきこまれ、翌年三十歳を一期として刑場の

露と消えにき。かくて、この短き一生の間、常に危險を冒し厄難とたゝかひ、明治の盛世を見るに及ばずして歿しけれど、松下村塾に幾多の英材を薫陶鼓舞して維新の大業を成すに與からしめたる偉大の効果を想へば、その人既に死せりといへども、なほ生けるが如くなり。

松陰己れが死刑の議の定まりしを聞きて、江戸の獄中より、その父母に

親をおもふこゝろにまさる親心
けふの音づれ何ときくらん

との永訣の歌を贈れり。何ぞ情思の温厚眞摯にして人を感動せしむることの深きや。

身を以て國家に殉じたる眞忠臣、親に對する至情を發揮したる眞孝子吉田松陰を出したる家庭の清高健全なること想ひ見るべし。こゝには、その母なる兒玉氏瀧子の事蹟のあらましを述べんと欲す。

瀧子は村田某の女なりしが、はやくより萩の藩士兒玉太兵衛といへる人に養はれ、兒玉氏を稱したり。その幼少の頃の生活のさまは、今詳かならず。二十歳に及びて、同藩士杉百合之助常道に嫁しぬ。杉氏は即ち松陰の生家にして、兒玉氏が三男四女をまうけける内、その第二男こそ、明治維新の急先鋒たりし奇傑兒寅次郎松陰なりけれ（松陰は叔父吉田大助の家を繼ぎて吉田氏を冒せり）。

杉氏の家は、萩の東郊なる松下村に在りて、忠誠篤學と節儉勤勉とは實にその美なる家風なりき。松陰が妹に與へたる書中に、「杉の家法に世の及びがたき美事あり。第一には先祖を尊びたまひ、第二には神明を崇めたまひ、第三には親族を睦じくしたまひ、第四には文學を好みたまひ、第五には佛法に惑ひたまはず、

第六には、田畠の事を親らしたまふの類なり。」といへるもの、その寫眞にして、余輩の贅言を添ふるを要せず。瀧子よく婦道を守りて、更にこの美風を助成し、子女の活模範となれり。左にその事例の一二を語らしめよ。

杉氏家貧なりければ、百合之助は專ら農業に從事し自ら田を耕し、自ら米を舂き、その餘暇には讀書をつとめて寸時も怠らず。仕官の後も、傍ら耕作をなして家道を助け、他の貧困者を濟はんことをこゝろがけたり、かくて、もとより婢僕とてなき家なれば、瀧子は夫を助け、耕作の勞をも任じて、自ら馬を牧するに至り、内に在りては、すべての家事を一身にて經理し、姑に事ふること極めて厚く、子女を敎養するに寬嚴よろしきにかなひ、義方よくそなはりき。また姑の妹なる人杉氏のかゝりびととなり病のために起居自由ならぬをも、心をつくして看護し、皆人に歎稱せられたり。されば、一家輯睦して、春風常にかよい、しかも剛健の活氣は自らこの裡に躍如たりき。

嘉永六年、松陰二十四歳にして、十年間四分に遊學の公許を受けて、先づ江戸に赴けり。到着の後二日即ち六月三日米艦浦賀に來りて通商を求めぬ。つぎて七月には、露艦長崎に來りぬ。尊王攘夷の說これより漸く盛んになり、志士東西に奔走して海内騷ぎ立ちき。松陰が海外渡航を企てけるは、卽ちこの際にして、その罪案定まりて一旦藩獄に下され、安政二年獄を出でて家に禁錮せられぬ。翌年、松陰松下村塾を開きて、家學を敎授しけるが、瀧子もまた心をつくしてその諸生を愛撫奬勵すること、殆ど己れが兒孫に異ならざりき。この一小塾より明治の英材の輩出せるは、主に松陰の薰陶の功なりとはいへ、瀧子の勞また與りて力

ありしは疑ふべきにあらず。

松下村塾の開かれしより三年を出でずして、松陰は討幕の義擧破れて、再び幽囚の身となり、終に江戸に送られて命を終りぬ。「親を思ふ」の哀歌に接したる瀧子の悲嘆如何なりけん。

松陰が義に死し國に殉したるは、瀧子或は慰むるところあらん。されど、瀧子はこれより先に四子を失ひたる上に、今またかゝる不幸にあひ、夫は松陰の連累によりて蟄居の身となれり。尋常の婦人なりせば、哀傷の極、心を喪ふにも至らんを、瀧子は操持ます〳〵固く、よく家を守りて老年に及びぬ。實に健氣の至りなり。

明治二十三年八月、瀧子病にかゝり八十四歳にて歿りぬ。これより先、瀧子の寫眞太政大臣三條公の手を經て畏くも　皇太后宮　皇后宮兩陛下の淸覽に入りしが、この時　皇后宮陛下より畏き吊詞に祭粢料をまへ添へて賜はりき。こよなき光榮といふべし。

品性純潔にして仁恕の心に富み、能く姑に事へ、夫を輔け、善く子女を敎養し、勞に耐へ變に處して、始終を全ふせるこの賢母良妻の名は、實に婦人の模範として、松陰の名と共に不朽なるべし。德富蘇峰氏その著書『吉田松陰』に於いて、瀧子につきて「嘗て彼女の寬眞を見るに、豐頤、細目。健全溫厚の風竊然として掩ふべからざるものあり。」といへり。或はその面目を髣髴するに足らんか。

（完）

ローランド夫人　鄭越生抄譯

死屍途に充ち、流血杵を漂はす、悽愴といひ、慘鼻